途上劇　子供好き

K　M　作

場所　省線電車内――（御茶水驛）
時　初夏の夕刻
人物　一、若い會社員A
　　二、その朋友B
　　三、三十歳前後の丸髷の女
　　四、その女の子供――（二歳許の愛らいし男の兒）

電車は丁度會社のひける時刻なので、どれもこれも滿員。

若い會社員のAとBとは、混み合ふ電車の中で、二歳許の愛らしい男の兒を抱いた丸髷の女の前に餘地を見出して、吊革にぶら下る

電車は動き出す。

警笛がブー……ブーと長く二度響く。

窓から舞ひ込む軟い風が乘客の頰を心地よく撫でる。

子供は風に翻る土産の桃色の旗を喜ぶ。

Aは子供の無邪氣な喜びをながめてにつこりする。ちらと友の顏を見る。

A「ねえ君、おれはどういふもんか、ばかに子供がすきでね――そのせいか子供も――大がいの子供は、おれにはすぐなついて仕舞ふから妙だよ……矢張りどつかしら、子供にすかれるところがあると見えて、これでねえ……」

B「……」

A「可愛いゝ兒ぢやないか」

丸髷は子供を褒められてにつとする。

A「坊ちやん、いゝ兒ですね――そら、をぢさんをごらん、べろん〳〵〳〵」

Aは夢中になつて、口唇に人差指をあて撥いて、しきりに妙な顏をする。

子供は何と思つたか、急に口がへの字なりに曲つて、「ワァッ」と泣き出す。

B「なる程ねえ」獨言。

――幕――